

ヨエル書とラオディキアのセブンスデー・アドベンチスト教会-第四十一号

Jeff Pippenger

2026-02-05

第四十一

レビ記第二十三章は春の祭りと秋の祭りを提示しており、全体構造の中で、構造そのものにおいても、また冒頭部と終結部の構造が完全に整合している点においても、これらの祭りの表象は神的に深遠である。春の祭りとは秋の祭りは互いに呼応している。この章は、「驚くべき計数者」たるパルモニを繰り返し証言している。この章はまた、十四万四千人の終わりの時のメッセージと的確に、しかも驚くべき仕方で結び付いている。

「23」という数は、神性と人性の結合としての贖罪を表す。「レビ記」という名は、十四万四千人の祭司職を表す。なぜなら、すべての預言者が終わりの日について語っており、終わりの日の祭司たちは、ペテロが聖なる祭司職と呼ぶ者たちだからである。ペテロの聖なる祭司職とは、「真夜中の叫び」のメッセージを生み出す知識の増し加わりを悟る賢い者たちである。愚かな者、すなわちダニエルが悪しき者と呼ぶ者たちは、その知識の増し加わりを退ける。そして、このゆえに彼らが祭司として退けられることを、ホセアが告げている。

わたしの民は知識がないために滅びる。あなたが知識を退けたので、わたしもあなたを退け、わたしの祭司とはしない。あなたがあなたの神の律法を忘れたので、わたしもあなたの子らを忘れる。彼らが数を増すにつれて、わたしに対して罪を犯した。それゆえ、わたしは彼らの栄光を恥に変える。ホセア書 4:6、7。

イザヤがまた「栄えの冠」と呼ぶエフライムの酒に酔う者たちは、その栄光を「恥」へと変えられる。ホセアは、終わりの日々における知識の増し加わりを拒む者たちがラオディキアのセブンスデー・アドベンチスト教会であることを、明確に特定している。というのも、彼が「わが民」と記したからである。彼の民は祭司として退けられ、それは最後の、すなわち第四の世代において起こる。彼が彼らの子らをお忘れになるからであり、子らは最後の世代を表すからである。

合一

『レビ記第二十三章』の表題は、「十四万四千人の祭司職の贖い」を意味する。この真理は、書名と章番号の結び付けだけからでも導き出すことができる。レビ記第二十三章が扱う贖いは、“at-one-ment”（一体化）を意味し、神性と人性の結合を指し示している。その結合は、神の御言葉において多くの象徴によって表現されており、その一つは、人間の神殿が神の神殿と結び合わされることである。

人間という神殿は、「23」の男性の染色体と「23」の女性の染色体という枠組みを有している。ペテロは、十四万四千人の祭司職が「霊の家」と指摘している。それらの染色体は、男女が結び合うように結合し、神が結び合わせたものを、人は引き離しては

ならない。結婚は、at-one-ment の別の象徴である。レビ記「23」は、天上の大祭司の神殿と、十四万四千人である祭司たちの神殿との結合を意味する。

二十二の詩句

利未記二十三章における春の祭りは章の最初の二十二節に、秋の祭りは章の最後の二十二節にそれぞれ示されている。最後の節は四十四節であり、これは1844年の象徴である。すなわち利未記二十三章の成就として、反型的な贖罪日が第七の月の第十日に始まった年である。二十三章は二十二節ずつの二つの区分に分けられており、両者は祭りであることにより論理的に結び付けられているが、同時に、春により表されるキリストの外庭および聖所における奉仕と、秋により表されるキリストの至聖所における奉仕とによって、論理的に区別されている。

22

春季の祭と秋季の祭はいずれも二十二節によって表されており、それらの節は、二十二文字から成るヘブライ文字の証しに符合している。「22」は「220」の十一であり、「220」は神性と人性の結合の象徴である。「220」は、ユダの離散の二千五百年の始まりと、贖罪日に至る二千三百年の始まりとを表す。二千五百年の起点は紀元前677年であり、二千三百年の起点は紀元前457年である。したがって、神の軍勢が踏みにじられるとの預言と、神の聖所が踏みにじられるとの預言との間の連関をなすものとして、二百二十年が示される。これら両方の預言は、1844年10月22日に反型の贖罪日が到来したときに終結した。

その日に、人間の神殿と神の神殿とを結合するキリストの働きが始まり、その時、ハバクク書2章20節とヨハネによる福音書2章20節の双方が成就した。ハバククは、その時、神が至聖所におられることを示し、ヨハネは、信仰によってその至聖所に入るはずであったミラー派の神殿が、1798年から1844年に至るミラー派の人間の神殿の建造を画する四十六年の期間を完了していたことを記録した。「46」年の歴史は「23」と「23」から成り、その歴史のメッセージを最初に提示し始めたのは、欽定訳聖書の刊行から「220」年後に当たる1831年におけるウィリアム・ミラーの働きであった。1611年に刊行された神の御言葉は、「220」年後の1831年に人間の使者と結合された。春と秋の祭りの双方は「22」節によって表象されている。

同一主題に関する二つの系列がそれぞれ二十二節から成っているという事実は、預言的観点から、最初の二十二節を次の二十二節の上に重ね合わせることを要請する。かくして二つの系列をこのように整列させることにより、春の祭りにおいて表象されている外庭と聖所における奉仕を、至聖所におけるキリストの奉仕と結び合わせることになる。この預言的次元においては、それは二つの神殿の結合を表し、キリストの贖罪の御業を例証している。

一節から二十二節を二十三節から四十四節と対応づけると、ヘブライ文字の二十二文字によって、また「22」という数の象徴性によって、さらに諸祭の象徴性とそれらの祭が聖史において成就したことが相俟って証しされる、予言的な筋道が確立される。

春の祭りの初めはまず第七日安息日を指し示し、秋の祭りの終わりは第七年にあたる安息年を指し示す。アルファでありオメガである方として、キリストは、十四万四千の祭司職の系譜における「22」の二人の証人の始めと終わりに安息日を据えた。

1844年に始まった反型の大贖罪日の初めに、第七日安息日は特別の光であった。そして、七年目の安息年の光は終わりにおける光である。第七日安息日はレビ記「23章」における第一の聖会でもあり、同様に七年目の安息年は同章における最後の聖会である。安息日は同章における祭司の系統のアルファでありオメガである。最初、すなわち第七日安息日は、十四万四千人の祭司職のアルファであり、最後、すなわち七年目の安息年は、十四万四千人の祭司職のオメガである。

神と交わる者は、義の太陽の光のうちを歩む。彼らは、神の前で自分の道を墮落させて、贖い主の名を汚すことはない。天の光が彼らを照らす。地上の歴史の終わりに近づくとつれ、キリストおよび彼に関する預言についての彼らの知識は大いに増し加わる。彼らは神の目には無限の価値がある。なぜなら彼らは御子と一致しているからである。彼らにとって神の言葉は比類なく美しく、美しい。彼らはその重要性を悟る。真理が彼らに開かれる。受肉の教理は柔らかな光彩を帯びる。聖書こそが、あらゆる神秘を解き明かし、あらゆる困難を解決する鍵であることを彼らは理解する。光を受けることも光のうちを歩むことも望まなかった者たちは、敬虔の奥義を理解することができない。しかし、十字架を負ってイエスに従うことをためらわなかった者たちは、神の光のうちに光を見るであろう。『サザン・ウォッチマン』1905年4月4日。

ここで、反型の大贖罪日の終わり、すなわち「この地球の歴史の終末に近い」時に、「受肉の教理」は、反型の大贖罪日の初めに第七日安息日の教理がそうであったように、「柔らかな」光輝を帯びている。

イエスは契約の箱の蓋を持ち上げ、十戒が記された石の板を私は見た。十戒のまさに中心に第四条の戒めがあり、柔らかな光輪がそれを取り巻いているのを見て、私は驚嘆した。天使は言った。「それは、天と地とその中にあるすべてのものを創造された生ける神を規定している、十のうち唯一のものである。地の基が据えられたとき、安息日の礎もまた据えられたのだ。」『証言』第1巻、75頁。

レビ記23章は「土台」である第七日安息日に始まり、春季と秋季の祭りによって表象される祭司たちの証しは第七年の安息年によって終わる。第七年の安息年は、その土台の上に築かれる神殿を表す。終わりにおける第七年の安息年は2,520によって表され、ちょうど第七日安息日が2,300によって表されるのと同様である。第七年の安息年は「受肉の教理」を表す。第七日安息日は創造主のしるしであり、第七年の安息年は神性と人性の結合のしるしである。

線の整合

レビ記二十三章における春の祭りを秋の祭りと対応づけて考えると、過越祭の翌日には七日間の除酵祭が続く、初穂祭はその除酵祭の開始日の翌日に続く。三日間に三つの道標がある。

種なしパンの祭りをなす七日間は、聖会をもって始まり、同じく聖会をもって終わる。種なしパンの祭りが始まった翌日には初穂祭が行われ、春期の大麥の初穂が献げられる。五旬祭（七週祭とも呼ばれる）は、初穂祭から五十日後に行われる。初穂祭は、四十九日目に終わる七週間の期間の始まりを画し、その翌日、すなわち「五十」を意味する五旬祭が続く。

過越祭は十四日の夕暮れに開始される。過越祭は聖会ではない。

そして第十五日には、七日の種入れぬパンの祭りが来る。その七日の祭りの初日と最終日は、聖会である。

翌日、すなわち第十六日、初穂祭の日が到来する。それから、五旬祭へと至る七週が始まり、五旬祭は、春と秋の祭りに数えられる七つの聖会の一つである。初穂祭は聖会ではない。

また、第七の月の第一日には、ラッパの祭りは聖なる集会である。

第七の月の十日の贖罪日は聖会であるが、祭ではない。

仮庵の祭りの初日は聖会である。七日間の祭りの後に仮庵の祭りの第八日があるが、その第八日は、諸祭りが象徴する期間の外にあると見なされる。その第八日は聖会である。

これは、祭りを導入する第七日安息日を含めると、聖会が七つになることに相当する。七つの聖会と七つの祭りがあるが、祭りの配列は聖会の配列とは一致しない。最初と最後の道標は安息日であり、最初は日、次いで年に関するものである。アルファとオメガの安息日の間に位置づけられている祭りの中には、七つの祭りと五つの聖会がある。アルファの第七日安息日とオメガの第七年の安息年を含めるなら、聖会は七つ、祭りも七つとなる。仮庵の祭りの第八日は祭りの一部ではないと理解されており、それは「七のうちの第八」という謎を生み出す。ここで私が指摘している要点は、イエスが、パルモニとして、『23』章における数の多様な変化を、この上なく驚くべき仕方です秩序づけたということである。

春

春の祭りは、種なしパンの祭りの七日間の祭期を包含し、その初めにアルファの聖なる会合が、終わりにオメガの聖なる会合が設けられている。五旬祭は、春の祭りにおける第三の聖なる会合である。五旬祭は七週間の期間の後に到来し、その期間は第五十日の祭りをもって終わる。春の祭りは、四つの祭りと三つの期間から成る。四つの祭日は、過越祭、種なしパンの祭り、初穂祭、そして五旬祭であり、三つの期間は、種なしパンの七日間、五旬祭の第五十日に先行しかつそれを含む四十九日間、そして三つの段階から成る一つの期間である最初の三日間である。

過越の期間の初穂のささげ物は、五旬祭の日の初穂のささげ物と対応している。すなわち、過越の三日間における大麥の初穂のささげ物と、四十九-すなわち五十-日の五旬祭期の終わりに当たる五旬祭における小麦の初穂のささげ物である。

墮落

秋の祭期は、裁きへと導く十日の期間を開く特定の祭日から始まる。裁きから五日後には七日間の祭があり、その七日の初日と最終日が聖会として定められている。十五日から二十二日までは仮庵の祭が祝われ、続いて二十三日には地の安息日が守られる。

秋の祭りを取り、それらを春の祭りに重ね合わせると、二本の線が得られ、いずれも二十二の聖句で表される。ゆえに、それらはヘブライ文字二十二字によって表される。このようにすると、最初の道標は第七日安息日の聖会であり、最後の道標は第七年の安息の聖会である。

また、第七の月の十五日に、あなたがたが地の産物を取り入れ終えたときには、七日のあいだ、主のために祭りを守らなければならない。第一日は安息日とし、第八日も安息日とする。レビ記23:39

ペンテコステは前の雨であり、仮庵の祭りは後の雨である。ペンテコステにおける聖霊の注ぎは一日により象徴されていたが、仮庵の祭りにおいては、その聖霊の注ぎは一定の期間として示されており、その期間が終結すると、七日の後の第八日に当たる安息日が続く。聖霊の注ぎの最終的な顕現に続くその安息日は、地が千年の間憩う安息日を象徴している。

患難の時に、私たちは皆、町々と村々から逃れ出たが、悪しき者らに追われた。彼らは剣を携えて聖徒たちの家々に押し入った。私たちを殺そうとして剣を振り上げたが、その剣は折れて、藁のように無力に落ちた。そこで私たちは皆、昼も夜も解放を求めて叫び、その叫びは神の御前に上った。太陽が昇り、月は静止した。諸々の川の流は止んだ。暗く重い雲が湧き上がり、互いにぶつかり合った。しかし、静まり定まった栄光の澄みきった一箇所があり、そこから多くの水のとどろきのような神の御声が発し、天と地を震わせた。天は開いたり閉じたりして騒然となった。山々は風に揺れる葦のように震え、周囲に裂けた岩塊を投げ出した。海は鍋のように煮え立ち、陸に石を吐き出した。そして、神がイエスの来臨の日と時を告げ、永遠の契約をその民に授けられるとき、一句を語っては、その言葉が全地に轟き渡る間、間を置かれた。神のイスラエルは、目を天に注いで立ち、ヤハウエの御口から出て、最も大いなる雷鳴のとどろきのように全地を轟き渡るその言葉に耳を傾けた。それは戦慄すべきほどに厳粛であった。そして各句の終わりごとに、聖徒たちは「栄光あれ！アレルヤ！」と叫んだ。彼らの顔は神の栄光に輝かされ、シナイから下ったときのモーセの顔のように、その栄光を放っていた。悪しき者らは、その栄光のゆえに彼らを直視することができなかった。そして、神の安息日を聖く守ることによって神を崇めた者たちの上に、尽きることのない祝福が宣言されると、獣とその像に対する勝利の大いなる鬨の聲が上がった。

そのとき、地が安息すべきヨベルの年が始まった。『初期の著作』34頁。

ヨベルの年は、七年を一周期としてそれを七回重ねたのちの第五十年であり、これは五旬祭の第五十日に至るまでの四十九日に相当する。一連の秋の祭りを春の祭りと結び合わせると、五旬祭に至るまでの四十九日が生じ、五旬祭は仮庵の祭りの七日間の始まりを画する。五旬祭と仮庵の祭りは符合し、両者は共に、まもなく到来する日曜法に始まり、恩恵期間が閉じられるまで続く後の雨の期を指し示す。その後、主が再臨し、ついで地は安息に入るが、これは第七年の安息年、すなわち仮庵の祭りにおける七に添えられた第

八によって表象されている。

二十二節から成る両系列を併せるのは、いくつかの理由による。いずれの系列も二十二節から成っており、二十二は二百二十の什一であり、神性と人性の結合の象徴である。

両行とも、二十二文字から成るヘブライ語のアルファベットを表している。

両線はいずれも当該の祝祭を表している。

二本の線は、一年における二つの収穫期を表している。

二つの系列は、外庭、聖所、至聖所におけるキリストの御業を表している。『レビ記』は祭司たちを意味し、イエスは天の大祭司である。このゆえに、私たちが「行に行を、教に教を」の方法論をレビ記二十三章の全四十四節に適用することは正当である。

五旬節はキリスト教における初雨であり、仮庵の祭りはキリスト教における後の雨である。ゆえに、私たちは春の「五旬節の日」を、秋の仮庵の祭りの七日間と対応づける。ホワイト夫人が「艱難の時に、私たちは皆、町々や村々から逃れた」と述べたとき、彼女は迫害のゆえに神の民が荒野に住まう時を指し示している。仮庵の季節に仮庵に住むことは、地が安息のヨベルの休みに入ることへと直結する歴史を予表している。

ペンテコステの日は、仮庵の七日間の始まりを画する。次いで、ヨベルは、仮庵の七日間に続く第八日によって表象される。仮庵の祭りの五日前は贖罪日であった。それゆえ、仮庵の始まりを画するペンテコステの五日前に、裁きが標される。贖罪日の裁きの十日前がラッパの祭りである。これらを総合すると、ペンテコステによって表象される日曜法の五日前に、裁きが標される。そのさらに十日前に、ラッパの祭りが標される。

キリストのバプテスマは、彼の死・埋葬・復活を象徴していた。これら三つの段階は、過越祭における彼の死、安息日における彼の埋葬と休息、そして日曜日における彼の復活によって表されている。彼の死・埋葬・復活の三日間は、三つの段階から成る一つの道標である。ゆえに、春と秋の祭りという二つの系列の結合を、復活から開始する。三日目の復活は、五旬祭、すなわち日曜法へと至る四十九日の期間の始まりである。その四十九日の期間に先行するのは種なしパンの祭りであり、それは初穂の日の前日に始まり、その日の五日後まで続く。

初穂の復活から日曜法に至るまでは四十九日であり、すなわち第五十日が日曜法である。日曜法の五日前には裁きが表徴され、またその裁きの十日前にはラッパの警告が印される。復活は第一の道標であり、その五日後に種なしパンの期間が終結する。種なしパンの期間の終結から三十日後にラッパの警告が発せられ、その十日後に大贖罪日の裁きが印され、さらに五日後に五旬祭の日曜法が到来する。

これは、春季および秋季の祭りに対する「行に行」の原則による適用において、七つの道標を特定する。すなわち、種なしパンの祭りの初め、復活、種なしパンの祭りの終わり、ラッパの警告、審判、五旬祭、そして後の雨である。これら七つの道標は、アルファの第七日安息日とオメガの第七年の安息年という二つの安息日の枠内に配置されている。この二つの安息日の間に置かれた七つの道標は、五日間、続いて三十日間、十日間、五日間、そして七日間という期間を区分し識別する。

次にキリストの復活を整合させると、彼が弟子たちを「顔と顔を合わせて」教え、その後昇天した四十日の期間が見出される。続いて十日のあいだ、弟子たちは二階の部屋にいた。その十日間は五旬節の日に終わり、これは「日曜法」である。これにより、レビ記「23」によって表される祭司の系列に、四十日の期間と十日の期間が付加される。

復活から除酵祭の終わりまでは五日、そこからラッパの警告までは三十日、さらにキリストの昇天までは五日、さらに審判までは五日、さらにペンテコステの後の雨の七日間までは五日である。

種入れぬパンの七日間の初日の翌日には、初穂の復活がある。復活は種入れぬパンの七日間のうちに起こり、復活から五日後に種入れぬパンの期間は終わる。

種なしパンの祭りの終わりから三十日後、ラッパは警告の徴となる。

ラッパによる警告から五日後、キリストは四十日にわたって教えたのち昇天した。その昇天は、二階の座敷における十日間の始まりを画した。

そののち、彼の昇天から五日後に、審判が定められる。

五日後、五旬節の日曜令が、後の雨の七日間の期間を開始する。

十四万四千人は、小羊がどこへ行かれるにも、これに従う者たちである。エリヤとモーセは2020年7月18日に殺された。彼らは、わたしたちの主が十字架につけられたその場所で殺された。キリストの復活は、2023年12月31日の復活の予型であった。その日付に先立ち、2023年7月に、荒野に響く一つの声が、種入れぬパンとして表象されるメッセージを告げ始めた。パン種は誤謬と偽善と罪を象徴し、荒野からのそのメッセージは種入れのないものであった。2023年12月31日から日曜令に至るまで、レビ記23章は、十四万四千人の贖罪の枠組みを規定している。その枠組みは、ミラーの夢、マラキ書三章、そして黙示録十九章の「天の窓」と一致する。それはまた、西暦27年から34年の聖なる週における第三時と第九時とも一致している。

これらの内容は次回の記事で続けます。

「知識によって、諸室はすべての貴重で快い財宝で満たされる。」

身体と同様に、知性と魂にとっても、力は努力によって得られるというのが神の法則である。発達は鍛錬によってもたらされる。この法則と調和して、神は御言葉のうちに知的および霊的発達のための手段を備えておられる。

聖書には、この世の生活にも来るべき世の生活にもふさわしい者とされるために、人が理解すべきすべての原則が含まれている。そして、これらの原則はだれにでも理解できる。聖書の教えを受け止める心のある人は、聖書のひとつの箇所を読むにしても、そこから何かしら助けとなる思いを得ないではいられない。だが、聖書の最も価値ある教えは、たまの、あるいは断片的な学びによっては得られない。その壮大な真理の体系は、せっかちに、またはおろそかに読む者に見いだせるようには示されていない。その宝の多くは表面のはるか下にあり、丹念な探究とたゆまぬ努力によってのみ得られる。大いなる全体を形づくる真理は、探し求めて拾い集めなければならない。「ここに少し、あそこに少し」。イザヤ書 28:10

このようにして探し出して一つに集めるなら、それらが互いに完全に適合していることがわかる。各福音書は互いを補い合い、あらゆる預言は別の預言の解明となり、あらゆる真理は他のある真理の発展である。ユダヤの経綸の予表は、福音によって明らかにされる。神の言葉のあらゆる原理にはそれぞれの位置があり、あらゆる事実にはその意義がある。そして、その全体の構造は、設計においても実現においても、その作者を証ししている。そのような構造を構想し形づくることのできる知性は、無限なるお方のそれ以外にはない。

さまざまな部分を探し出し、それらの関係を研究する中で、人間の精神の最高の能力は激しい活動へと呼び起こされる。そのような研究に携わって精神力が鍛えられない者は一人もいない。

聖書研究の知的価値は、真理を探りそれをまとめ上げることにのみあるのではない。提示された主題を把握しようとする努力にもある。平凡な事柄だけに心を占められていると、知性は矮小化し、弱ってしまう。偉大で遠大な真理を理解する課題を与えられないなら、やがて知性は成長する力を失ってしまう。この退廃への歯止めとなり、発達を促す刺激として、神の言葉の学びに匹敵するものはほかにない。知的訓練の手段として、聖書は他のどの書物にも、あるいは他の書物をすべて合わせたものにもまさって効果的である。その主題の偉大さ、言葉の気品ある簡明さ、比喩の美しさは、他の何ものにもできないように思考を活性化し、高める。啓示の途方もない真理を把握しようとする努力ほどの知的力を授ける学びは、ほかにない。こうして無限なるものの思いに触れた知性は、広がり、強められずにはいられない。

そして、靈性の成長においては、聖書の力はいっそう大きい。神との交わりのために創造された人間は、そのような交わりのうちにのみ、自らの真のいのちと成長を見いだすことができる。神のうちに最高の喜びを見いだすように創造された人は、心の渴望を静め、魂の飢えと渇きを満たすものを、ほかの何ものにも見いだすことはできない。誠実で謙虚に学ぶ心をもって神のことばを学び、その真理を理解しようとする者は、その著者である方と触れ合うように導かれる。そして、本人がそう選ばない限り、その成長の可能性には限りがない。

聖書は、文体と主題の幅広さにおいて、あらゆる知性の興味を引き、あらゆる心に訴えかけるものを備えている。そのページには、最も古い歴史、もっとも真に迫った伝記、国家を統治し家庭を規律するための、これまで人間の知恵がいまだかつて及ばなかった原理が見いだされる。そこには、最も深遠な哲学、最も甘美にして崇高な詩、最も激情的であり最も哀切な詩が含まれている。こうして見るだけでも、聖書の記述は、いかなる人間の著作にも比べて価値において計り知れないほど優れている。しかし、それらを壮大な中心思想との関わりにおいて捉えるとき、その射程は無限に広がり、価値は無限に大いなるものとなる。この思想の光に照らして眺めると、すべての主題は新たな意義を帯びる。最も簡明に述べられた真理のうちにも、天にまで届き、永遠を包み込む原理が含まれている。

聖書の中心的主題、すなわちその周囲に書全体にわたる他のすべての主題が集約される主題は、贖いの計画、すなわち人間の魂における神のかたちの回復である。エデンにおいて下された宣告のうちに示された希望の最初のほのめきから、黙示録におけるあの最後の栄光に満ちた約束——「彼らは御顔を仰ぎ見、御名は彼らの額にある」(

黙示録22章4節) ——に至るまで、聖書のすべての書とあらゆる箇所の要諦は、この驚くべき主題の展開である。すなわち、人間の高挙——「主イエス・キリストによって私たちに勝利を与えてくださる」神の力(第一コリント15章57節) ——である。

この思想を把握する者の前には、研究のための無限の領域が広がっている。彼は、神の御言葉の宝庫全体を彼の前に開く鍵を有している。

贖いの科学は、すべての科学の科学である；天使および墮落していない諸世界のあらゆる知性的存在が研究する科学；我らの主にして救い主が御心を注がれる科学；無限者の御思いのうちに深く思い巡らされてきた御旨—「永遠の時代を通して沈黙のうちに保たれていた」(ローマ16:25、R.V.)—に関わる科学；そして、神に贖われた者たちが尽きることのない永遠の世々にわたって研究する科学である。これは、人間が従事する最高の研究である。他のいかなる研究にもできないしかたで、知性を鼓舞し、魂を高揚させるであろう。

「知識のすぐれているところは、知恵が知恵ある者にいのちを与えることにある。」
「わたしがあなたがたに語ることは、霊であり、いのちである」とイエスは言われた。「永遠のいのちはこれである。すなわち、彼らが、ただひとりのまことの神であるあなたと、あなたが遣わされた方を知ることである。」
伝道の書7章12節；ヨハネによる福音書6章63節；17章3節、R.V.

諸世界を存在へと呼び出した創造的な力は、神の言葉のうちにある。この言葉は力を与え、いのちを生み出す。すべての命令は約束であり、意志によって受け入れられ、魂に受け取られるとき、それは無限なる方のいのちをもたらす。それは人の本性を変え、神のかたちに従って魂を新しく造りかえる。

かくして授けられたいのちは、同様にして保たれる。「神の口から出るすべての言葉によって」(マタイ 4:4)、人は生きる。

精神、すなわち魂は、それが糧とするものによって養われ、築き上げられる。そして、何をもってそれを養うかを定めることは、われわれに委ねられている。思いを占め、品性を形づくる主題を選ぶことは、すべての人の力の及ぶところにある。聖書に接する特権を与えられているすべての人に対し、神はこう仰せになる。「わたしは彼に、わたしの律法の大きいなる事柄を書き記した」。「わたしを呼べ。そうすれば、わたしはあなたに答え、あなたの知らない偉大にして力強い事柄をあなたに示そう」。ホセア書8章12節；エレミヤ書33章3節。

神の御言葉を手にしつつ、人生の歩みがどこに定められていようとも、すべての人は、自ら選ぶ交わりを持つことができる。その頁を通して、人類のうち最も高貴にして最善なる者たちと語り合い、また、人に語りかけられる永遠なる御方の御声に耳を傾けることができる。彼が「天使たちも見たいと願っている」(第一ペテロ 1:12)とこの主題を学び、黙想するとき、彼はその天使たちの交わりを得ることができる。彼は天の教師の足跡をたどり、山においても、野においても、海辺においても教えられたときのその御言葉に耳を傾けることができる。彼はこの世にありながら天の雰囲気の中に住み、地上の悲しむ者や誘惑にさらされている者たちに希望の思いと聖さへの憧れを分かち与えつつ、自らは見えざる御方との交わりにますます近づき、いにしえに神と共に歩んだあの人のように、永遠の世界の敷居にいよいよ近づき、ついに門戸

が開かれてそこに入るに至るであろう。彼は、そこにおいて自分が見知らぬ者ではないことを見出す。彼を迎える声は、見えざるまま地上で彼の伴侶であった聖なる者たちの声であり、ここで彼が聞き分け、また愛することを学んだその声である。神の御言葉を通して天との交わりのうちに生きてきた者は、天の交わりの中にあって、わが家にいるように覚えるであろう。『教育』， 123-127.